

# 第二次世界大戦前後の日系人の生活と文学

—「羅府新報」と「トパーズタイムズ」を通じて—

The Life and Literature of Before and After World War II

— from Rafushinnpou and Topa-zu Taimes —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

2011年初め恩師猿谷要氏が亡くなられた。私にとって一つの時代が終わったような衝撃を感じた。私がアメリカ合衆国に深い興味を抱いたのは、先生の講義を受け、その中で紹介された先生の多くの著書を読んだからだ。それ以前は広大なアメリカ合衆国は日本の友好国であり憧れの国であった。しかし、先生の著書を通して自分の考えがいかに間違っただけであるかを知った。白人を中心に多くの移民を迎え入れ、自由と平等の国だと考えていた。しかし現実には、多くの差別の歴史を持ち、それは、過去だけのものではなかった。

そこで、自分の研究の中で本当の合衆国の姿を明らかにしたいと思うようになっていった。猿谷先生の専門はマイノリティー、特に黒人問題である、先生の講義の中で知った黒人問題から新たなマイノリティー日系アメリカ人の存在を知った。自分は、このマイノリティーの中でも自分の祖先と同じ道につながる日系人の研究をライフワークにしようと考えた。以後長い年月を日系移民について歴史から始まり文学に至るまで研究を続けている。

この研究の中で日系アメリカ人の最大の苦難が第二次世界大戦中の強制収容所体験だと

考える。そこでこの時代の歴史的事実を追い、その中、強制収容所で生まれた日系人対象の新聞トパーズタイムズと戦前から日系人のコミュニティの中で多く読まれてきた羅府新報の内容を確認し、その中から戦時中の日系人の文学作品とその後再開して新聞の中の作品を調べることで一連の日系アメリカ文学の基礎を追っていきたい。

## 1 真珠湾攻撃と第二次世界大戦

1924年の排日移民法以来厳しい生活を強いられていた日系人に対して最大の悲劇を引き起こしたのは、1941年12月8日に日本海軍隊によって行われた真珠湾攻撃だった。それ以前から日本に対して警戒を深めていたフランクリン・D. ルーズベルト大統領は、日系人に対して直ちに海岸から遠ざけるように動いた。海岸線に近いと日本人と日系移民が連絡をして合衆国に日本人を招き入れると考えたからだ。しかし、この命令が出る前、日系人の忠誠心に対して「90%の日系二世は合衆国に対して忠誠であり、日系人より共産主義者の方が危険である。」という報告がカーチス・B・マンソンによって出されたが、捕虜になった日本海軍のパイロットの脱走を手

助けしたり真珠湾攻撃の手助けをした日系人の存在が、日系人に対する厳しい対応を余儀なくしたと考える。

こうした状況の中、第二次世界大戦が始まっていく。戦争の没発後、日本軍によるアメリカ本土侵攻の危惧が広がり様々なプロパガンダにより日系人の立場はどんどん悪くなっていった。12月30日にフランシス・ビドル法務長官は、日本国籍を持つ日本人移民の家だけでなく家族の中に一人でも「敵性外国人」がいれば令状なしでも捜索できるようになった。さらにカール・R・ベンディッテン少佐を太平洋沿岸州に送り込み、陸軍参謀総長を無視して「敵性外国人」の強制収容所へ日系人を送り込むことを秘かに計画し始めた。

1942年1月には、排日的なマスコミや組織の格好の話題となり、激しいプロパガンダで日本軍が攻めてきたとき、西海岸地区にいる日系人が呼応するという恐怖を西海岸の人々に与えた。このような排日活動がそれぞれの組織を支持基盤とするカリフォルニア州選出議員を経てワシントンに伝えられ、1月15日、連邦下院のマーチン・ダイス議員が下院で、28日に第五列活動が存在した事実を握っていると公言した。誰も見ていない活動なのに実在したものとして報告された。

日一日とアメリカの戦況は悪くなりいよいよ日本が本土に上陸するという恐怖により政府が後押しされた形で「大統領令9066号」が1942年2月19日反日感情が病的なほど強かったフランクリン・D・ルーズベルト大統領によって承認された<sup>1)</sup>。このようにカリフォルニア州やワシントン州、オレゴン州などのアメリカ西海岸沿岸州と準州のハワイ地域に住み、市民権が与えられない、あるいははく奪された日本人、アメリカ国籍を持つ移民一世と、その子孫で日本人の血が16分の1以上混ざった日系アメリカ人たちの強制収容がおこ

なわれることになった。

そして3月11日、ベンデッチェン大佐を長官として、立ち退きを指揮する戦時民事管理局WCCAを発足させた。また、3月18日にはルーズベルト大統領9102号が発令されるに至り戦時転住局WRAの創設を命じ、初代長官にアイゼンハワー將軍の弟ミルトン・S・アイゼンハワーが任命された。1942年3月24日に、最初の強制立ち退き命令が出て、3月30日までに、シアトル近くのブヤラップ陸軍仮収容所に収容された。

強制立ち退き命令から実施までは1週間程度しかなく、携帯品は、a) 家族全員の寝具とリネン、b) 家族全員の化粧品、c) 家族全員の着替え、d) 家族全員分の什器、e) その他の重要な身の回り品（ベットは不可）とされた。そして手荷物は手に持てる物のみとされた。この品物や、当時使われたかばんなどは、ロサンゼルス全米日系人博物館に提示されている。この展示品を見ると、人々がいかにわずかな品物しか持って行けなかったかよく分かる。

多くの不動産を不当な処理に任せるしかなかった日系人は失望の中で仮収容所に移った。この収容所は16か所で競馬場だった場所もあり有刺鉄線に囲まれ据えられた場所だった。さらに1942年11月3日までに、仮収容所から転住所に移動させられていった。

## 2 強制収容所の概要

先にも述べたように大統領令9066号の発令以降、12万313人の日系アメリカ人がアメリカ全土の11か所の強制収容所にいれた。また他にもニューヨーク州ニューヨークのマンハッタン島の横にあるエリス島の横にあるエリス島にある施設にも約8000人が収容された。これらの施設は全て人里離れた内陸部の砂漠にあり、仮収容所同様に有刺鉄線が張ら

れた場所で、配置された警備員は銃口を常に収容所の内部に向けていた。このため道に迷って策のそばに近づいた日系人が撃ち殺されるなどの悲劇も絶えなかった。

施設は急ごしらえの粗末な住居や各種工場や農場、病院、商店、学校、教会、劇場などでそれらの施設で働く者には給与が与えられた。また収容所内では自由に移動ができたが、施設で扱えない病気にならない限り外部に出ることはできなかった。この施設の部屋は、木造のバラックで隣の声が筒抜けのプライバシーがほとんど守られない厳しい環境だった。全米日系博物館に再現されている食事は配給されたが好みに合うものではなく、また食事を得るには長い時間待たなければならなかった。高齢の一世はこのような生活の中でいきる目標を失い病に倒れたり神経障害になったり、やがては自殺する者など悲劇の記録が多く残されている。しかし自給自足を求められたこともあり農作業をしたり様々な学校ができた趣味を広げる文化センターも作られ、毎日厳しい生活を強いられていた一世や二世にささやかながら人間らしい生活を過ごせたという記録もある。この中には改めて日本文化の伝承も行われ若い世代に祖国の文化を知る機会になったひな祭りにひな人形を飾ってお祝いしたり、お盆には先祖を供養するなど日本の行事も多く行われた記録がある。数年前3月3日にロサンゼルスを訪れた時、日系のホテルのロビーにはひな人形が飾られていた。今もなお当時のように日本の文化を伝承していることに驚いた瞬間であった。しかし、すべてが良い要素ではなく、常に身近に暮らす一世と二世の間には価値観や考え方の違いで多くのトラブルもあり、やがて修復できなくなったギャップも出てきた。

そんな収容所の生活に潤いを与えようとしたのが収容所の中で発行された新聞だった。

またそれ以前に発行された日系人のための新聞も政府の介入を逃れなんとか存続していた。そこでここではそれらの新聞を比較することでその内容の違いと、新聞が果たした役割、そして何よりその後の日系人による文学作品の登場にどのような影響を果たしたかを調べていきたい。

### 3 「羅府新報」について

先に述べたように日系人に対する新聞は、第二次世界大戦前から発行されていたものと戦中の強制収容内で発行されたものがある。そこで発行された年代順に考察を進めていきたい。

海外バイリンガル日刊では最大といわれる「羅府新報」は、カリフォルニア州ロサンゼルス市で発行されている有料新聞である。現在の発刊部数は15000部ほどで、日本語版と英語版があるが、購読者は日本語版のほうが多い。購読者は南カリフォルニア、さらに全米にまたがるだけでなく、日本や他の国に存在する人も購読しているという。この「羅府新報」は1903年（明治36年）4月、移民の山口正治、渋谷清次郎、飯島敬一郎の3人によってアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスのリトル東京で創刊された。羅府は、感じ読みでロサンゼルスという意味である。最初は、週2回250部からスタートした「羅府新報」は、1940年に日露戦争が始まると400部を突破、山口氏らは合資会社を組織し、美人投票などの企画で読者を獲得したという。

1907年には、経営者が飯野陣内、野沢宏、中村正平、戸田弘定の四人になり、編集部と工場の区別をつけるなど新聞らしい体制を備えた日刊紙になった。1901年1月1日には「羅府年鑑」第一号が発行され15年まで続いた。その後1938年から1941年まで発刊は続いた。

その間経営が苦しくなった時期もあったが、1922年駒井豊策らが株主になり基盤が安定した。そして1926年には英語版が発行された。こうしてターゲットを二世に広げ人種差別、排日移民法通過、1930年代初期の経済恐怖、日米関係悪化など困難な社会、国際状況の内容を伝えている。こうして「羅府新報」は第二次世界大戦が勃発し、日系人の強制立ち退きが発令されるまで新聞は発行され続けた。

この新聞が再刊されたのは、1946年だった。戦争がはじまりほとんどすべての新聞は戦時中発行を禁止された。このように当時政治不安を掻き立てる情報手段は禁止されて行った。このような状態で唯一発行が許されたのは、夫が亡くなった後女手一つで発行を続けていた「ユタ日報」だけであった。そこで日系人は日常の情報を求めてユタ日報を読んでいたという。戦時中の文学を研究する折多くの投稿作品を研究してきたが、今回は「羅府新報」と「トパーズタイムズ」の比較をテーマにしているので深く紹介をしないが、日系人の強制収容所での飾りのない言葉や表現が紙面に現われている。収容所を出てからはほとんど自分達の体験を語らなくなったのでこのころの作品が唯一当時をしる貴重な史料である。

さて「羅府新報」が1946年再刊一号の新聞を調べると強制収容所の当時の思いが俳句や短歌の形で投稿されている。ここで再刊された1946年1月1日の新聞の中に掲載された和歌を紹介したい。

晴野 毛利さいさんぼく  
 大き陽斜に落つる窓をみる  
 砂丘しかに紫に濡れ  
 柳型をば夕陽に干して眠る男  
 トカゲ静かに尾をとれるも

夢に見し妻の面影やまにやつれ  
 悲しきことをかたりけるかも

再起の年が明けた 神浦獣洋  
 苦難の日が暮れ  
 再起の年が明けた  
 血のひいた顔にも笑浮かべて

まっしぐらに進もうぜ  
 二世よ立ってくれ  
 三世の為に  
 そして一世をひきつれて

すわ再起の年が明けた  
 われらの再起の年だ  
 浸たる血を拭き取って  
 まっすぐに進もうぜ  
 二世よ立ってくれ  
 三世の為に  
 そして一世をひきつれて  
 君の荷は重く道は険し  
 でも七転び八起きすべき  
 吾民族の意志と熱と気骨と  
 誇りとを引き受けて

さらに4月30日には収容所をテーマにした和歌が掲載されている。

収容所詠 梢 月

霧晴れつつ夕べ 静けき群鳥の  
 音無く過ぎしテキサツの空  
 山を見ぬ荒野の瀧宵の幕  
 下りつつはかなき細月光る  
 うたふイトドはかなし棚下  
 に羽づくろいしつなきつきて  
 居り

サロリーの黄葉にそへて野辺  
の花つましく生きてともしき  
に居り  
ともかくも今はあり経む冬来  
なはいかに過ぎさきいえなき  
はらから  
人の世の歴史にも見ぬ変動なり  
夕陽の色も星も身に染む  
物の芽のはつかに萌し庭に  
して蟻の生活は営まれをり

さらに収容所での思い出を表現した作品を  
紹介したい。

月に捧ぐる芋と

印象深い2回目の観月は偶然にもポモナより  
ハート山へ送らるる汽車の中だった。幸い  
にして電燈に故障を生ぜしため車中に燈火な  
く、果てしなき草原より煌々として立ち上  
がる明鏡の如き明月は斜に車内を照らし、同  
胞の顔はほの白く麗しくみられた。十目の  
見るところ、十指の指すところ、これみな神  
神しき明月である。口よりほとばしる声はこ  
とごとく感嘆詞であった。

観るほどに行くほどに月は寸借と地を離れ、  
ある時は巖山に鬱現し、或いは樹木に明滅し、  
…

ハート山の十六夜も美しかった。空青き深  
夜の月それはすごいほど美しい美しい眺め  
だった。

高峰を背に千軒の秋の月

150斤の自然石に自ら右の句を刻しハート  
山退去の前日、住居の庭の地中深く埋めたの  
であった。帰還後の今日、月を眺めてハート  
山想ひ、疲れては又キャンプ生活を連想し、  
なつかしき思い出の数々は走馬灯の如く尽  
きことを知らぬのである。

この作品は日系人の収容所の思い出が言葉

として表現されたことで重要である。この先  
もしばらく多くの短歌同好会が募った作品が  
特集になって紙面に登場することも多くみ  
られた。しかしこの後、日を追うごとに日系  
人たちは自分達の思いを語らなくなるから  
である。現在日系移民の文学作品を研究す  
る中でおよそ1960年代後半までは調べ終  
わっているがさらに調べ、いつから日系人  
たちが自分の思いを改めて表現するよう  
になり、やがて多くの二世三世が文学作  
品を書くようになっていったか調べてい  
くつもりである。

ところで「羅府新報」は前述のように戦  
時中は発刊を禁止されていた。収容所で  
生活していた日系人の作品には「羅府新  
報」の作品と違いがあるのだろうか。そ  
こで今度は、収容所にいた当時の日系  
人の作品を収容所内で発行された「ト  
パーズタイムズ」を通じて調べてい  
きたい。

#### 4 「トパーズタイムズ」について

「トパーズタイムズ」は、日系人コ  
ミュニティーで早くから出版された新  
聞ではなくトパーズ収容所の中で出  
版されたコミュニティー新聞である。  
これは、無料で各世帯に配布され  
た収容所内の唯一のメディアだった。

1942年9月17日から1945年8月31  
日まで430号が日系人によって編  
集、刊行された。2006年研究した  
「ユタ日報」と違い、これは収容  
所の中での出版という特徴を持つ<sup>2)</sup>。  
ユタ日報は、日本語中心であった  
がトパーズタイムズは、基本的に  
英字新聞であった。

しかし、年を追うごとに、日系一  
世に対する情報伝達が必要となり、  
日本語の紙面が増え、それにと  
もなない俳句、短歌、エッセイ  
なども姿を現してくる。今回は、  
ユタ日報の中の日系文学作品の  
基礎となったエッセイや俳句や  
短歌がどれだけ「トパーズ  
タイムズ」の中に出てくるかに注  
目してみた。「トパーズ

タイムズ」は、1990年に、日本で復刻された復刻版10巻（1942年11月10日～1945年8月17日）の中から紙面の関係上、第6巻の途中までを考察する。

なお「トパーズタイムズ」の主な目的は、収容所の人々がWRAの政策や通達を知り、日系人が1つのコミュニティーに生活しているという形をとりたいアメリカ側の意図により、記事の検閲は極めて少なかったという。この点は、第2次世界大戦開戦後、大半の日系新聞が出版中止となり女性の日系アメリカ人の出版ということで唯一認められた「ユタ日報」と大きく異なっている。「トパーズタイムズ」は1942年9月17日から1945年8月まで発刊された。「羅府新報」では1946年以降の作品を紹介したので、ここでは同様に収容所入所当時の新聞の中からいくつかの文学作品を紹介したい。

1942年9月、トパーズタイムズが発刊された頃、まだ移転して間もないこともあり食料不足や水不足の問題、さらに個人調査のお知らせなど、なれない場所での生活をバックアップする内容になっている。そんな記事の間に投稿された短歌、俳句さらには随筆などが掲載されるようになっていった。その中でも当時の日系人の気持ちがよくあらわれている作品を紹介したい。

「思い出の12月7日」

12月7日一思い出深い日、驚天動地の日になつかしくも今日1年振り返って帰ってきた。思へば実に感慨無量である真珠湾への第一弾が投下された瞬間、我々の生活に急変のスタートを切ったのである。実に「運命」の第一弾。「運命」のその日だった。それから1年次から次へと激しい経験が我々をおそい、今、ようやく再建設の緒に就いてやや落ち着きを見出したようではあるが、今後なおどこまで続くか分からない茨の道である。こ

の険路を切り抜けるには苦しい勤労と、激しい闘争と多くの犠牲を要求されるであろう…。

1943年1月9日には英詩が載せられている、トパーズタイムズは収容所の情報伝達を主として一世だけでなく二世も生活していたはずだが投稿される短歌俳句随筆の中にはなかなか英文のものは見つけられない。ここに貴重な二編の作品を紹介したい。

#### POEM ON TOPAZ

By the moon light in the morning,  
I noticed the first snow on the top of Mount  
TOPAZ

The moon on the top of Mount TOPAZ  
Please tell my message to my beloved one  
beyond.

“I am doing very well here.”

The city of TOPAZ  
Today you show us the morning of the world  
which blows windows leaves  
Sand on the desk in the room.  
While snow freezes without molting the morning  
We patiently wait the ray of rising  
Falling snow scene being also pleasant.  
TOPAZ is better or more comfortable place than  
we thought first.

Makoto Furuicawa (pen name)

#### LEIGH HUNT

Not, this my Rom-st.Peter's dom.  
Long dulled pristine Art of sistin.  
The north wind chills on seven hills.  
No captive train.  
On Campagnais plain.

この二編の詩は周りの景色を表現したものであるが詩の中の形容詞はどれもその自然の

厳しさを現すものである。日本語で語られた一世の作品よりも二世のこの作品の方が作者の自然な思いが表れている。

トパーズタイムズで特に注目したいのは、1944年4月1日にトシオモリの作品が掲載されていることである。トパーズタイムズに注目して研究し始めたのは、大学院で1988年に出された市民的自由法の背景を研究し始めた時のことだった。その際に数多くの日系一世を中心とした俳句や短歌が掲載されていることを知った。その後日系アメリカ人による文学作品を研究し始め改めてこの時代の作品がその後の二世を中心とする文学作品の基礎であることに気づいたのである。その中で戦後多くの作品を書いた二世のトシオモリが紙面に作品を発表することによって戦前なかなか執筆活動がすすまなかった彼にとって皮肉にも多くの時間を持てたと彼の作品を戦後翻訳した大橋吉之輔のあとがきに書かれている。翻訳を通じて話し合う機会があった二人の対談の中での発言だという<sup>3)</sup>。

羅府新報の中で紹介した作品は戦後収容所を出た後直後の人々の心情を描いたものである。そこでここでは収容所を出る直前の作品を紹介したい。

1945年5月25日

秘秘と祖国を偲ぶ郷土歌 春子

6月1日

転住の友と行く春惜しみけり 中村梅夫  
転住の思案もつかず春暮れる 服部獏零

日々変わる戦況になど迷はじと 思へど  
またも

心騒ぐも 和佐りん

何事も運命のままにまかせ置き 徒然の

まま

尺八を吹く 松野三禱

収容所の中にもまだ故郷への思い出にふけりまた二つの故郷の戦いに心痛めた日系人の心を表した作品である。

## 5 「羅府新報」と「トパーズタイムズ」の比較

今まで述べてきたように、この二つの新聞は日系人によって発刊されている。しかし「羅府新報」は「ユタ日報」同様に第二次世界大戦前なかなか英語がわからなかったり生活に馴染めない日系一世中心の日系人コミュニティに生活の情報を与えることを目的に発刊されたものであった。しかし日常生活の中で少しずつ生活に潤いが求められ、また固く心を閉ざし歯をくいしばって生活してきた日系人たちが、短歌や俳句の募集に込められた本当の心の中の叫びを表現する機会が与えられた。そんな矢先、第二次世界大戦が勃発し日刊紙は発刊中止となり、それに代わる形で収容所の新聞が発刊されるようになった。そうした境遇の中で発刊されたのが「トパーズタイムズ」である。発刊当時は施設の案内や食事の時間、配給の知らせなど事務的なものが多かったが、年月が流れるにつれて、人々が自分の今の気持ちを言葉に表したいという気持ちが現われ、短歌や俳句、更には短編小説などが紙面に見られるようになった。この、短編小説や、英字の随筆が見られるのが、「トパーズタイムズ」の特徴である。この時代がその後の日系アメリカ文学に多大な影響力になったと考える。戦後再開した「羅府新報」の中では、1950年以降までそのような作品がみられない。収容所を出た後日系人たちの生活が再び苦しく忙しいものとなったからであろう。しかし、何より、収容所を出

た後、日系人にとって収容所に入ったことを自らの罪のためのように思い恥ずかしいと考え、当時の生活について日1日と1世2世たちが心を閉ざしていったことも大きな要因であろう。

### 終りに

最近日系三世の知り合いと強制収容所の生活について語る機会があった。彼の両親はまだ幼く収容所に入ってから多くの友達と暮らし遊べて楽しかったと言っていると話してくれた。真実はわからないがそのような発言が聞けるとは思っていなかったのでとても驚いた、と同時に少し安らぎを感じた。多くの苦難と悲しみにあふれた生活だと聞かされていたので、そのように感じた日系人もいたことにはほっとしたのかもしれない。1988年の市民的自由法で収容体験のある家族の手に入った2000ドルは、自分達の教育費の一部になった、と彼は笑っていた。ステレオタイプの収容所の生活にとらわれないで、もっとあらゆる角度から日系人の歴史をとらえなければならぬと考えた一瞬だった。現在アメリカ史の中の日系人史とその時々の方々の文学作品を結びつけることで、さらに細かい研究を進めようと考えている。今後は多くの三世四世とも交流することによって、過去と現在さらには将来の展望についても研究していきたい。恩師猿谷先生が伝えてみえたアメリカ合衆国という大きな国の中に暮らす様々な人種の歴史に光を与え人々の声を聞き取っていきたいと考えている。

### 注

- 1) この大統領令はその数ヶ月後に実際発令された。
- 2) この内容は「金城学院大学論集」第3巻第二号 2007年3月 に詳しく書いている。
- 3) 彼のあとがきには次のように書かれている。「トシオモリ氏は開戦とともに、荒涼たるユタ州トパーズの日本人収容所に収容され、1945年の終戦までそこにいた。皮肉にも、その収容所生活が、同氏にとって物を書く暇が一番あった時だそうである。」トシオモリ。大橋吉之輔, カリフォルニア州ヨコハマ町, p202.」

### Work Cited

- 『強制州所新聞「トパーズタイムズ」』日本図書館センター, 東京, 1990.
- 田村紀夫, 『復刻「ユタ日報」』, さつき書房, 長野, 2004.
- トシオモリ, 大橋吉之輔, 「カリフォルニア州横浜町」, 毎日新聞, 1992.
- 山本茂美, 「日系アメリカ文学の発祥—ユタ日報を中心に—」, 金城学院大学論集, 人文科学編, 第3巻第二号, 2007年, 3月.
- 山本茂美, 「日系アメリカ文学の発祥を求めて—トパーズタイムズを中心に—」, 愛知学院大学 語学研究所, 語研紀要, 第33巻第1号, 2008, .
- 山本茂美, 「第二次世界大戦直後の日系アメリカ文学1946年」, 1947年の『羅府新報』の作品を通じて—」, 愛知学院大学 語学研究所, 第34号第1号, 2009.

### Work consulted

- 1 藤沢全, 「日系文学研究」, 大学教育社, 1985, 東京.
- 2 上坂冬子, 「ユタ日報のおばあちゃん」, 寺澤国子」, 瑞雲舎, 2004, 東京.
- 3 黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京, 1979.
- 4 鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京, 1971.
- 5 村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社, 1971.
- 6 若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京, 1971.